

清楚な美女から豹変…

実は男だった

白昼堂々、女装して来店!

鎌倉の八幡宮そばにある呉服屋、浜松屋はその日も大賑わい。忙しさもひと段落ついた頃、店員達

客を装い、恐喝

そこへ高島田に振袖姿の武家の娘と、お供の侍が現れた。

彼らの話の様子では、今日はどうやら婚礼衣裳を買いに来たようだ。

婚礼支度というこ

は目の覚めるようなト一（美女のこと）の客が現れないものかと、談笑していた。

とで、娘は京染めの振袖、錦の帯や緋鹿の子などを出させ、若党と選り始める。そのうち娘は、た

直す。この仕草に氣付いた手代が、番頭に耳打ちするや否や、店の者は皆、あわてて並べた商品を片付け、小僧のひとりはお頭へ万引きがあつたと知らせに行った。店の者が警戒している中、娘は知らぬ顔で、これから八幡様にお参りして来ると言い、店を出よ



発行
白浪五人男
ブログ



くさんの商品が出て
いる中、懐から緋鹿
の子の小裂れを出し、
また人目を憚るよう
にして懷中にしまい

騒動の後日談



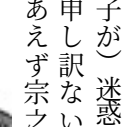
与九郎・
「やあ、
やあ美女
と思つて

たら、男で驚いたよ
うまいったね。ありや
詐欺だね。」



か。お前
なんか、
よだれ流
しながら、
見とれてたもんな。

相変わらず間抜けだ
な。」



子（迷惑を掛けて、
申し訳ない。（とり
あえず宗之助が良い
子に育つ
て良かつ



た♡



幸兵衛・
「二人と
も、（私
の奥の息

腕に桜の刺青
で男とバレる

店の者の無礼を詫びた。店主は鶯頭の清次を介して十両の包を渡し、事を穏便に済ますように頼む。

揉み合いの末、
娘の額に怪我

しかし、娘の懷から出た緋鹿の子の小裂れには、山形屋の符牒がついていた。

結局、万引きは間違ひであると分かる。ただちに店の者は詫びるが、若党の怒りはおさまらず、店主を呼べといきり立つ。

その騒ぎを聞き付けた店主が出て来て、

昔は女兒と比べて、男児は生命力が弱かったせいか、迷信で七歳まで「女兒の格好」をさせられた男児がいたらしい。河竹黙阿弥の「三人吉三」（初演一八六〇年）の主人公お嬢吉

昔は女装男子が多かった？

三も、幼い頃から女の格好で育った、という設定である。弁天小僧も女装はするが、普段はむしろ赤やピンクを好んで着る不良と似たような感覚ではないだろうか？



(c)FUJI-NISHI.2005

ところがその金額に不満でもあるのか、若党はそれっぽっちゃと突き返す。店主は百両を包んで出す。それで、やっと納得して二人が店を出ようとしたところ、玉島逸当という武士が現れ、二人は「託び金」目当ての「騙り」だと見破る。そして娘の腕に桜の刺青があることから、実は「男」であることも見破る。

知らざあ言つて聞かせやしよう

正体をバラされた途端、さつきまでの楚々とした美しいご令嬢が「南郷、もう化けちゃアいられねえ。おらア尻尾を出してしまうぜ。」と態度も豹変し、急にふてぶてしくなり、どっかと胡座をかく。

歌に残せし盗人の、種は尽きねえ七里ガ浜、その白浪の夜働き、以前を言やあ江の島で年季勤めの児ヶ淵、江戸の百味講の蔭錢を、当てに小皿の一文子、百が二百と賽銭の、

その名も弁天小僧菊之介

くすね錢せえだんだんに、悪事はのぼる上の宮、岩本院で講中の、枕捜しも度重なり、お手長講を札付きに、とうとう

島を追い出され、それから若衆の美人局、ここやかしの寺島で、小耳に聞いた米祖父さんの、似ぬ声色で小ゆすりかたり、

名さえ由縁の弁天小僧菊之助とは俺がこつた。」
「参考文献・『知らざあ言つて聞かせやしようー心に響く歌舞伎の名せりふ』赤坂治績・新潮社より」
《脚注》
しちりがはま・現在の鎌倉市七里ガ浜。だいたいの稲村ヶ崎と江の島の間。

なんと女装男の正体は泥棒だった！

てっきり女と思っていたら、男だったことに店の者は一同驚く。男は居直って、自分は今、世間を騒がせている盗賊団の一味、女装の盗賊・弁天小僧菊之助だと煙草を燦らせながら、自身の正体を明かした。若党・四十八はその仲間の南郷力丸であった。

なぜか自己紹介する泥棒

「知らざあ言つて聞かせやしよう。浜の真砂と五右衛門が、



えのしま・鎌倉市腰越と隣接する島。現在は神奈川県藤沢市に属する。

ちごがふち・江の島の西岸にある淵の名前で、弁天小僧が寺の雑務や僧侶の「お手伝い」をする稚児として年季奉公していたことと、かけている。

名前の由来はその昔、ある僧侶が江の島参詣に來た折、稚児の白菊（男）を見初め、思いを告げた

が、禁断の愛に白菊は悩み、ここから身投げし、僧も後を追って自殺したという伝説から。

かみのみや・江の島内にある寺社のこと。だんだん「エスカレーターしていく」意味の「のぼる」と「上の宮」が掛け詞になっている。

いわもとといん・同じく江の島内にある寺社。現在は岩本楼という名前の旅館になっている。

てらじま・「ここらへんの寺社一帯に」という意味と、初演した市村羽左衛門の

本姓（名）である「寺島」とをかけている。

＊「じいさんの」の箇所は尾上一門でない役者が演じる場合は、「音羽屋」となる。「じいさん」三代目・尾上菊五郎のこと。「ここやかしの寺島で」以降の部分は、楽屋落ち。

意外とセコい小悪党

だまし取った百両を投げ出し、居直る二人であったが、あまりの図々しさに武士が二人を斬り付けようとする。彼らは怖じけるどころか、「（斬るんなら）すっぱりとやってくれい」と言い出す始末。だが弁天小僧は、「ぶたれた俺の向う傷をどうしてくれる」と、しつこく強請るので、店主は葉代として、二十両を渡す。二十両をせしめて、ようやく南郷と弁天小僧の二人は浜松屋を去って行った。